シリーズ TACという懸け橋 Vol.①

「買ってくれる人」がいるからこそ、農業を続けることができる。生産者と手を携えながら、消費者とのさらなる結びつきを求め、日々奮闘するTACの姿を追う。

福岡県　JAにじ／JA全農ふくれん | 新潟県　JA胎内市／JA全農にいがた | 静岡県　JAとぴあ浜松／静岡県JA営農センター | 滋賀県　JA北びわこ／JA全農しが | 愛媛県　JA西条／JA全農えひめ | 宮城県　JAあさひな／JA全農みやぎ | 岩手県　JA新いわて／JA全農いわて

JAにじ 江藤睦（左）アグリふるかわ代表理事 石井哲雄（右）㊤

ホウレンソウを前に。二人三脚でここまで歩んできた。㊧

収穫作業の働き手となった女性たち。地域の雇用創出にも貢献。㊨

「江藤くんを信じてやってみよう」

40aの畑には、ホウレンソウが栽培されている。畑を前に、農事組合法人「アグリふるかわ」の代表理事・石井哲雄は期待を込めて言う。「今年は、昨年よりも出来がいい。収穫が楽しみです」。

同法人は機械利用組合として平成12年に発足したのち、品目横断的経営安定対策の実施にともない営農組合として再編。平成23年に法人化検討委員会を立ち上げ、毎月の協議を経て、翌年7月に農事組合法人へ移行した。後継者不足・高齢化で離農する人たちの「土地の受け皿」が必要不可欠だったことも法人化を加速させる一因だった。

尽力したのは、JAにじ作物振興課のTAC・江藤睦だ。法人化に否定的な人たちとの話し合いも繰り返した。

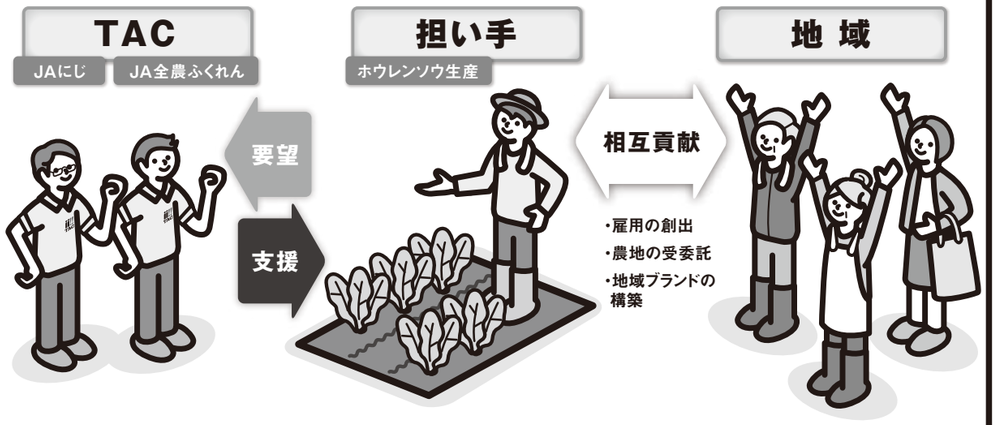
法人の運営にあたっても課題があった。経営の安定と所得向上のためには、米・麦・大豆のほかに、新たな品目を導入しなければいけない。「初期投資が少なくて済む」「農閑期の1～3月に収穫ができる」「価格が比較的安定している」「作業が機械化できる」などを条件に、JA・行政・普及センターと協議した結果、ホウレンソウが適切と判断。江藤の提案に対し、同法人の石井は、「不安だったが、江藤くんを信じてやってみようと思った」と導入を決めた。JA全農ふくれんの担い手支援策（担い手助成）を活用し、ホウレンソウづくりに取り組んだ。

取り組みが地域にもたらしたもの

1年目は、天候不順のため生育が遅れ、思うような成果を出すことができなかった。しかし、この取り組みが地域にもたらした影響は少なくない。ホウレンソウの収穫調整作業では、働き手として集落内の女性たちを雇用した。「話し合いの場を持てた」「収入になった」と好評で、地域振興の一助となった。

今後の展開として、TACの江藤は、「地域ブランドの構築」を狙う。販売チャネルを増やすと同時に、六次産業化にも思いを馳せる。「うきは地区は果樹地帯ですが、ここで採れた野菜もあるんだ、と消費者に知ってもらいたい。地元産という〈付加価値〉をつけていきたい」と考えている。

担い手との二人三脚を続けながら、江藤はこれからも地域農業を支えていく。



第8回JAグループ 国産農畜産物商談会
2014年3月12日（水）10:00～17:00／13日（木）10:00～16:00
東京国際フォーラム展示ホール　主催 JA全農／JAバンク／JA全中

TAC（タック）とは、「地域農業の担い手に出向くJA担当者」の愛称です。
TACの役割
①地域農業の担い手に訪問してご意見・ご要望をうかがい、誠実にお応えします。
②地域農業の担い手の経営に役立つ各種情報をお届けします。
③地域農業の担い手のご意見を持ち帰り、JAグループの業務改善につなげます。
TACの由来
Team for Agricultural Coordination
JAグループが一体となって地域農業をコーディネートします。

営農販売企画部 TAC推進課
TEL：03-6271-8276
www.zennoh.or.jp
全農